# 町外からやってきた生きものたち

「近ごろ動植物たちの世界に異変が起きている」このような話を聞くことが多くなりました。そう言われてみると、今まで町内で見たことがない生きものに気づきます。いつの間にか奥三河全域に広がった蝶ツマグロヒョウモンをはじめ、ラミーカミキリ、クマゼミ、ナガサキアゲハなどの昆虫の仲間や、いつも話題になるニホンジカ、ニホンザル、ハクビシンなどの動物たち、植物では、タカサゴユリ、セイタカアワダチソウ、マツバウンラン、など町内にいなかったものがどんどん多くなってきました。それは、私たちにとって有り難いものや有り難くないものに分かれます。今回は町内に入ってきた動物ベスト4を紹介したいと思います。

ニホンツキノワグマ（設楽町西納庫）

**一、ツキノワグマ**　大型の哺乳類で愛知県絶滅危惧ⅠA類になります。本県のレッドデータブックには、一九三二年以降三頭の狩猟統計記録と死体発見を含む数件の目撃記録があるのみで、定住固体は無いと考えられています。しかし、クマの移動については不明な点が多く十数年かけて広い範囲で行動し、一時的に多く目撃されることがありますが、やがて少なくなると言われ、今後の調査が大変重要になってきました。

本町のクマについては二〇〇〇年九月に目撃情報が入り、故原田先生と調査に出かけたのが始まりで、年に二・三度の目撃情報が入るようになりました。二〇一〇年六月五日、西納庫川口地内の農地に近い山林内で、イノシシのわなに入ったクマが報告されました。今回、このような形で捕獲されたのは県内で初めてのことだと思います。県指導のツキノワグマ出没対応マニュアルには、生け捕りになった場合、放獣か引渡しの検討がされ、どちらも不可となれば捕殺にて適正処理されます。

今回初めてのケースで前例がないため、地元の方々や町役場の担当者が色々手を尽くし、努力して適切に対応してくれたおかげで、引渡し先が見つかり移送することになりました。こうした事例は今後も起こりうる可能性が高いため、よりよい対策方法を考える必要が出てきました。

**二、セグロアジサシ**　カモメの仲間で熱帯から亜熱帯の島や沿岸地域に生息し、日本では小笠原諸島や沖縄諸島に夏鳥として渡来します。本州でも稀に記録されますが、これはマリアナ諸島などの南方地域から台風によって運ばれると考えられています。

この鳥は二〇〇九年十月八日の台風十八号によって設楽町にやってきました。八橋地内で保護された時には疲労困憊していて、飛ぶことも歩くこともできませんでした。早速、獣医さんに診察してもらい手当てしましたが、その甲斐なく一週間後に死んでしまいました。何とか元気にして古里へ帰してやれなかったことが悔やまれます。これは、本町では大変貴重な出来事で、二例目の発見となりますが、生きて保護されたのは初めてのことでした。

次は自然界にとっては、いずれも大変な脅威になっていることを紹介します。

**三、アライグマ**　北米のカナダ南部からパナマあたりに生息する日本にいなかった生物です。夜行性で山林から都市部まで様々な環境に生息し、雑食性で何でも食べます。

人気アニメ、あらいぐまラスカルの影響でペットとして日本に持ち込まれたものが逃亡または放たれて野生化増殖し、農作物への被害が深刻になってきました。北海道では、大変な問題となり被害対策ハンドブックを出して対応しています。

愛知県でも一九六二年に犬山市で発見されてから二〇〇九年七月五日には、岡崎市切山町で発見、同年十二月二十四日には、田峯地内でメスのアライグマ一頭が捕獲されました。奥三河初の事例となり今後の情勢が大変危惧されます。

アライグマ（設楽町田峯）

**四、ソウシチョウ**　中国南部を中心に広く分布する鳥で、大きさは日本のウグイスぐらい、姿はオレンジ・グリーンの部分が目立つ綺麗な鳥です。鳴き声も非常に良いことで知られ、オオルリやウグイスなど様々な野鳥の鳴きまねが得意な鳥です。漢字で書くと相思鳥「相手を思う鳥」ということで名づけられ、非の打ち所がないように思いますが、日本では天敵がいないため、オオルリやウグイスなどの在来種をなわばりの外へ追い出し、生態系を崩してしまいます。

本格的に日本に入ってきたのは、一九八〇年以降ペットとして持ち込まれたものが自然繁殖しました。本町では六年ほど前に段戸裏谷原生林で繁殖を確認してから町内各地域の自然林で見られるようになりました。

私たちが住んでいる奥三河の動植物については、県内でも特に多種類の生きものが住んでいる地域で知られています。しかし、全体を見ると増えるものより減るものの方が断然多いこともわかってきました。

（設楽町文化財保護審議会委員）
加藤　博俊